

# 起業家ものがたり

世代交代の波

## 家業から企業へ

④



新興セルビックが取得した特許の故々(竹内宏社長)

父は根っからの職人だった。金型メーカー、新興金型製作所の社長、竹内宏(46)は子供のころから油まみれで働いていた父・康彦の背中を見て育った。

父は親せきの経営する金型会社に勤めていたが、仕事は正確で取引先の評判も良かった。宏はそんな父のような腕のいい金型職人になろうと、工業高校を卒業後、ある中堅金型メーカーに「丁稚奉公」に出た。

ところが数年後の七三年、父の会社でちょっとした内紛が発生。父は思い切って独立を決め、宏と一緒に新興金型を旗揚げした。ちょうど第一次石油ショックのころだったが、二人三脚で取引先を開拓し、仕事も順調に伸びた。

ようやく軌道に乗った矢先、大きな危機に直面する。八三年父ががんを倒れ、宏は自ら社長として会社を切り盛りしなければならなくなった。しかも八五年のブラザ合意をきっかけに円が急騰、大手家電メーカーなど主要取引先からの受注は一気に三割も落ち込んだ。

どうすればいいのか。あれこれ思案した揚げ句、ふと思いついた

### 「金型」生かし自社ブランド

のが金型をカセット式に取り換えられる装置の開発だった。これなら少量多品種の部品製作もコストを安く抑えられるはずだ。装置の製作は初めての経験だが、金型づくりで培った知識や設計の技術が生きた。

「ユニット金型」と名付け、知り合いの工作機器メーカーに試作品を見せたところ「売れる物になるよ」と大鼓判をもらった。取引先のカシオの担当者も採用を約束。早速新会社「新興セルビック」を設立し、製造から販売までの体制を整えた。

以降、新興金型で金型製作を続けるかたわら、新興セルビックを通じて新しい省力金型装置を次々に開発。弁護士や弁理士を通じて年間数十件のペースで特許を出願している。最近では各種の論文を発表したり、金型業界のリストアップについて講演を頼まれることも多い。

そんなせいか、宏の周りにさまざまな技術者が出入りしはじめ、二年前には技術者集団「アイデア工房」も誕生した。会員のアイデアを製品化し、セルビックを通じて販売する。これまで超小型の射出成型機など六点を発表した。

父は「自社ブランド」を作るのが夢だった。家業を継いで十一年。アジア勢が力をつける中で、金型製作は縮小せざるを得ない。宏は父の夢を実現する時期がやってきたように感じている。

# 日経産業新聞

発行所 日本経済新聞社  
 東京本社 〒100-6600(03)3270-0251  
 東京都千代田区大手町1-9-5  
 振替口座 00130-7-555番  
 大阪本社 〒540-0606(06)943-7111  
 大阪市中央区大手前1-1-1  
 振替口座 00920-1-73217番  
 名古屋支社 〒460-0002(052)322-2561  
 名古屋市中区正木2-3-1  
 振替口座 00830-6-6149番  
 西部支社 〒812-0001(092)473-3300  
 福岡市博多区博多駅東2-16-1  
 振替口座 01710-1-1248番  
 札幌支社 〒060-0001(011)281-3211  
 札幌市中央区北1条西7-3  
 ©日本経済新聞社 1994